



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヨシヤの改革 : 「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」 [全文の要約]
Author(s)	高橋, 優子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13833号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78686
Type	doctoral thesis
File Information	Yuko_Takahashi_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 高 橋 優 子

学位論文題名

ヨシヤの改革：「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」

序論

旧約聖書の列王記下 22－23 章および歴代誌下 34－35 章に記録されている「ヨシヤの改革」あるいは「申命記改革」と呼ばれる出来事は、旧約聖書学の要として機能している。年代決定のために唯一確からしいと認められているのがヨシヤ改革の時代だからである。それは、ユダ王ヨシヤの時代に行われたという改革で、前 7 世紀後半の出来事であった。列王記によると申命記によって改革がはじまり、歴代誌によると既にはじまっていた改革に申命記が拍車をかけたという。当該改革で最も有名なのはヤハウエ崇拜をエルサレム神殿に限定する「祭儀集中」および異教の神々に関わるものを廃棄するという「祭儀浄化」である。これはいわゆる「一神教」のひとつのはじまりを画する出来事であると考えてもよい。

この思想史上の大変化は、どのようにして生じたのであろうか。本論文の提案は、ヨシヤ時代にエルサレムのエリート層（宮廷役人およびエルサレム神殿祭司）が、前 672 年にアッシリア王エサルハドン（在位前 681-669 年）によって発行され、当時のアッシリア支配下にあったすべての領域に配布された「エサルハドン王位継承誓約文書」に刺激を受けて法典（原申命記）を編纂し、それを綱領として生き残りをかけた政治的宗教的改革を行ったということである。旧約聖書中のアッシリアは残虐な侵略者として描かれているために、旧約聖書へのアッシリアの影響という考え方を受け入れられない聖書学者も存在する。しかし、そのような態度は短絡的に過ぎる。2009 年にトルコのテル・タイナトでも「エサルハドン王位継承誓約文書」が発見されたことは（出版は 2012 年）、エルサレムにも同じものが存在した蓋然性を非常に高めたといえる。

ヨシヤ改革に対する当該文書の最大の貢献は、誓約が永遠性を持ちうることを示したことにある。この文書が発行されるまで（あるいは発行された後でもほとんどの場合）少なくとも古代西アジアにおいては、誓約当事者の死とともに誓約は無効になると考えられていたようだ。そのため、誓約を継続する場合には、新しい当事者が新たな誓約を行う必要があったのである。エサルハドン王位継承誓約文書はこの伝統を超えて効力を持続させることを意図していた。当初はエサルハドンと他の多くの属王・属領の役人たちが当事者であったが、内容はエサルハドン死後のことである。「大皇太子アッシュルバニパル」が確実に王位につき、統治できるように、属王その他の人々に彼への忠誠を誓わせるものであった。さらに、アッシュルバニパル死後もその子孫にしたがうようにと要請している。もちろんその場合、誓約者たちも代がわりしているはずである。タイナト版「エサルハドン王位継承誓約文書」の名宛人として個人名は書かれておらず、代わりに職名が羅列してある。それは、特定の個人との誓約ではなく、永遠に継続すべき誓約であった。もちろん歴史が示すようにアッシュルバニパルとその子孫への永遠の忠誠の誓約は実現しなかった。

しかし奇抜な方法で当該文書の斬新かつ革命的な発想を取り入れたのが原申命記の記者であった。「イスラエルの民がヤハウエに対する永遠の忠誠を誓う」ことを要請する法文書

を作りだしたのである。当然のことながら、これは当時のエリートたちが、自分たちの理想を実現するために用意した形式である。ヤハウェの命令である法典の内容に従え、ということによって、イスラエルが激動の古代西アジア世界で生き残ることが目的であった。

本論文は、申命記が「エサルハドン王位継承誓約文書」(ESOD)のテキストから直接的影響を受けている具体的指標として、「交差的引用」に焦点を当てる。さらに傍証として、申命記とレビ記の「呪いのリスト」にも「交差的引用」が存在することを示す。これは申命記が「エサルハドン王位継承誓約文書」から排他的に(ESODのみから)影響を受けたことを証明することにはならないし、当該文書に含まれる個々の要素すべてがアッシリアに起源を持つことを意味するわけでもない。そうではなく、申命記という書物が成立するにあたって、「エサルハドン王位継承誓約文書」が最も重要な役割を果たしたということ、あるいはそれなしでは申命記とそれに基づく思想が現在まで継続することはなかったということを示すのが目的である。「エサルハドン王位継承誓約文書」が申命記を申命記たらしめたということを認識させてくれるのが、当時の書記の不思議な習慣なのである。

問題設定

いわゆる「ヨシヤの改革」について宗教史学的アプローチを試みる。ESODが申命記に直接的文学的影響を与えた痕跡を、文献学および考古学の知見を用いて探る。

方法

文献学および考古学の援用は、聖書文献学・聖書考古学にとどまるものではない。このテーマにおいては聖書資料も充分とはいえないため、内容的・時代的に関連が想定される楔形文書資料にあたる必要がある。とくに古代イスラエルに多大な影響を与えたことが容易に想像できる新アッシリアのアッカド語文献を参照することが要請される。具体的には近年の研究成果によって、前 672 年にエサルハドン王によって発行され、領内および属国にくまなく配布されたことがほぼ確実となったエサルハドン王位継承誓約文書と聖書資料を比較分析することで歴史的事象に新たな光を当てることができると期待される。

聖書考古学的資料の検討

本論文では「ヨシヤの改革」研究に際してしばしば「証拠」としてとりあげられるメツァド・ハシャブヤフ、アラド、ラキシユについて概観しているが、ラキシユのデータから多少積極的な解釈を引き出せる以外には、ほとんど有意な要素が見いだせない。聖書考古資料からは茫漠としたヨシヤ改革の像を得る以上のことができない。改革の歴史性を否定する必要まではないが、「実証的アプローチ」からの果実を得ることは今のところ非常に難しいといわざるをえない。しかし将来的には画期的な発見がある可能性もあるので、聖書考古学の成果についても目配りを継続すべきである。

ESOD の文献学的・考古学的重要性

タイナト版 ESOD の発見による新知見を受けて、当該文書と周辺状況がヨシヤの改革あるいは申命記改革と呼ばれる歴史的事象に与えた影響を再検討する必要がある。ここでの課題は ESOD の文献学的研究や申命記の文献学的研究そのものではなく、ヨシヤ改革の宗教史的研究である。そしてその際「ESOD が申命記に何らかの影響を与えた」という自明の事柄（それを積極的に評価するか消極的に評価するかに関わらず、両テキストに似た記述が見られることを否定する者はいない）や、両テキストの間に引用にあたって使用されることがある「交差的引用」というレトリック自体を問題としているわけでもない。あえて言うのであれば、そのレトリックに新しい意味を見出す試みである。

さてタイナト後の現在旧約聖書学の世界では ESOD の申命記に対する影響を重要であるとみなす一部の研究者と、それに反対する研究者が激しく対立している。ESOD の影響を過小評価しようとする研究者たちは Oral Tradition やレヴァント全体の文化など、特定不能の大きなカテゴリーにこの論点を吸収することに意を注いでいる。しかし筆者は、なお直接的影響関係を示すことは可能であると考え。それはテキストの形式的特徴を探ることで見出される。さらに ESOD と申命記の対応関係を再検討する必要がある。その際、渡辺和子の業績を参照することが必要条件となる。

交差的引用あるいは転位

逐語的引用の他、聖書テキスト間の引用時に使用される “inverted quotation” 「交差的引用」についてのサイデル (M. Seidel)、バーンチェス (P. C. Beentjes)、レヴィンソン (B. M. Levinson) らの知見を援用すると、28 章はもちろん、類似が明白ではなかった 13 章にも、直接的引用関係が認められることが明白となる。それゆえはじめに 28 章を、次に 13 章と ESOD の関連を精査することにする。現在、申命記の成立時期との関連で、申命記と ESOD の並行関係をどう見るかが争われている。以下、具体的に ESOD と申命記の対応関係を見ていくことにしたい。

比較検討結果

ユダ王国の書記が原申命記起草において ESOD から引用する比較的整った形式が見られる。それは、Oral Tradition のような変化し易い間接的影響ではなく、直接的影響を示唆しているということを筆者は提案する。「直接的」というのは、書板を書記が自分の横に置いたかどうかはともかく、アッカド語原文を読みながら、申命記のヘブライ語原文を書いていたということを意味する。これは、アラム語訳から引用したと想定しているステイマンズとは異なる。ステイマンズはタイナト版公刊以前に申命記 28 章という誰の目にも明らかな ESOD との並行箇所を調べ、両者に影響関係がないとはいえない、という見解を随所で述べているのであるが、筆者は 13 章も 6 章 4-5 節も扱っている。オットーもタイナト以前から 6 章 4-5 節にさえ言及していたが、そもそもヨシヤの改革の歴史性を否定している点で、筆者とはまったく出発点が異なる。

ステイマンズともオットーとも違う筆者の主張は、ESOD から申命記が引用する際、必ずではないが比較的高い頻度で現れる交差的引用が、テキストの内容的な先後関係とは無関係に、テキストの（直接的文学的）先後関係についてある程度の指標を提供するということである。

ヨシヤの改革に対する思想的意義について言えば、主意的連関を伴う行為を要求する「聖なる文書」の作成、さらに当事者の生死に依存することのない「永遠の誓約」（民の個々人は死ぬが子々孫々に伝えることが義務づけられている）という概念がヨシヤの改革とその影響を受けた後代に、当事者が意図したものより壮大な影響を与えることになったということが重要であると思われる。神々のみならずアッシュルバニパルやエサルハドンの位置にヤハウエを措定することで、ヤハウエにオリエントの専制君主的性質を付与し、また祭儀集中と祭儀浄化があらゆる複数性を排除したことから、後に改革者たちが意図することもしなかった唯一神教への移行が生じたと想定できる。

ESOD と申命記の間には非常に似ている部分が存在するが、それは古代西アジアの文化の共通性を示すにとどまらないし、ただ単に特定の文書に影響を受けて似たような文書を作ったというにとどまらない。申命記の起草者は、ESOD の特別で思想史的に革命的な概念装置を意識的に導入したのである。もちろん彼らはユダ王国亡き後、それがさらに発展して、現在の唯一神教に至るとは思ひもしなかったに違いない。しかし、聖なる不変の文書や永遠の誓約を持つ神と民という概念から、今日「アブラハムの宗教」として知られ世界人口の半分以上に影響を与える思想が生まれてきたのだとすれば、その思想史的意義を小さく見積もることは決してできない。

「一神教」概念の変遷と申命記 6 章 4－5 節の年代

いわゆるシェマーの最初の部分である申命記 6:4-5 は、しばしば唯一神教の宣言として解釈される。しかしその年代は前 7 世紀後半と推測され、ESOD の強い影響がうかがわれる。当該箇所は原申命記には存在しなかったかもしれないが、ヨシヤ時代（改革期）に最初の申命記史家によって原申命記に付け加えられたと思われる。6:4 は重要な箇所であるにもかかわらず解釈が困難であるが、おそらくヤハウエの「比類なさ」「特別性」を強調しており、恒常的拝一神教の宣言であって、元来唯一神教の宣言であったとは解せない。ヒッタイト文学を含む古代西アジア一般の間接的影響は歴史的序文という 6:4-5 が含まれるユニットの性格自体に読み取れるが、6:5 に命じられる「愛」はイスラエルのヤハウエに対する愛であって、ヤハウエのイスラエルへの愛は言及されていない。この点から、申命記 6:5 にもっとも影響を及ぼしたのはヒッタイトの伝統ではなく ESOD のものであると想定できる。もちろん複合的引用の可能性を否定するものではないが、申命記 6:4-5 に関する限り、もっぱら ESOD から引用されているというべきであろう。

王権観の変遷とヨシヤの改革の関係

聖書資料に現れる古代イスラエルにおける王権の特徴は、古代近東の周辺諸国のそれと重なりを持ちながら、重要な相違を示している。それはイスラエルの王が民からの超越性を

持たない、すなわちイスラエルの王権が比較的弱いということである。この特徴ゆえに、ユダ王国の宮廷役人（書記）グループが **ESOD** の形式と内容を受容する際、神々やエサルハドン、アッシュルバニパルが主体（あるいは客体）になっている部分にヤハウエを入れて読むということが可能になり、しかもその読み替えゆえに後の思想史に巨大な影響を与えたのではないかという提案をしたい。原申命記から存在していると考えられる「王の法」（申 17:14-20）は王権を顕著に制限しているが、（ヨシヤ時代の）申命記史家においてこの方向は後退している。そして、捕囚後にはヤハウエが王と同一視されることになる。その背後には、幼いヨシヤ王の後見をしたグループの関心、成人したヨシヤ王を利用しようとしたグループの関心、そして王制自体が存在しなくなった後に力を持ったグループの関心を順に読み取ることができるかもしれない。

少なくともヨシヤ王が幼く後見を受けていた時期の王権は、相対的に弱いものであった。そのため原申命記に **ESOD** のスタイルと内容を受容する際、神々のみならずエサルハドンやアッシュルバニパルの場所に神ヤハウエを読み込むという奇抜なアイディアが生まれたのかもしれない。その後ヨシヤ改革期には、王の力を利用して（原）申命記を宣布する必要上、列王記などの申命記史家的作品では、王権が再強化されている。しかし先の「読み替え」ゆえに、王制の存在しない捕囚期には当該文書とその内容の神聖化が進み、王権は人間ではなくヤハウエ自身に帰属するという観念が成立したのである。

ヨシヤの改革と詩篇 72・80 篇

ヨシヤの改革と詩篇 72・80 篇の関連性を探ることにある。ヨシヤの改革研究史においては、詩篇のような作品は、その文学的特質上特定の歴史的出来事と排他的に結びつけることが難しいため、ほとんど扱われてこなかった。他方詩篇研究史においては、とくに詩篇 72 篇および 80 篇についてヨシヤの改革との関連に言及する例が散見され、ヨシヤの改革と両詩篇の関係についてさらなる考察が必要とされている。

ヨシヤ改革の時代は、詩篇 72・80 篇のある部分と深い関係持っていると考えられる。もちろんそれは、ヨシヤ改革を歴史的に再構成する際の素材として使える性質のものではない。

結論

本論文では、研究史をたどることによってエサルハドン王位継承誓約文書(**ESOD**)と申命記の比較の必要性が明らかになったため、両者の比較を行なった。その際 **ESOD** 研究の第一人者である渡辺和子の業績を主として参照した。

「交差的引用」という手法によって、多少わかりづらくはなっているものの、逆にその痕跡によって、**ESOD** の申命記（主に 28 章と 13 章、そして 6 章の一部）への直接的影響（唯一の影響ではないであろうが）を示すことができた。原申命記の記者（そしてヨシヤ時代の申命記史家も）は、この文書を作成する際、自分の近くに **ESOD** あるいはその写しを置いていたのかもしれない。つまり未発見ではあるが、エルサレムのヤハウエ神殿に **ESOD** が安置されていたというのが非常にありそうなことだと言える。

ESOD 受容の際、ユダ王国の書記は奇抜な置き替えを行なった。ESOD に出て来る神々の場所にヤハウエを入れただけでなく、王エサルハドンや皇太子アッシュルバニパルの場所にまでヤハウエを読み込んだのである。そしてユダ王国の主神であったヤハウエは排他的な崇拜を恒常的に受けることになった。これを一神教のカテゴリーへの移行が起こったと評価することができる。それは聖書の記述とは異なり、前 7 世紀にはじめて起こったことと考えられる。「(自分たちの) 神と同じように」ESOD という文書を扱うという、はじめは強制された習慣を脱構築し、文書を尊重しそこに記された契約を守る、という形の宗教がこのとき生まれたのである。この宗教は、国家なきあとのユダヤ人のアイデンティティを形成し、彼らを混沌とした世界の中で生き残らせてきた。後に現れるキリスト教やイスラム教も、同じ文書を基礎として生まれてきた。現在見られる唯一神教の立場から聖書を読むと、最初から唯一神教が存在したように感じられるが、そうではなく、前 7 世紀後半という特定の時点に、エルサレムの宮廷周辺にいた書記層・祭司層といった特定の人々が、彼らの国家のために行なったことの結果唯一神教が生まれたのである。この改革運動は、はるかに遠い反響を引き起こした。

ESOD が申命記に与えた直接的影響の指標が「交差的引用」にみられるということの傍証としては、レビ記 26 章（神聖法典中）の「呪いのリスト」と申命記 28 章の「呪いのリスト」の間にも「交差的引用」がみられることが挙げられる。ユダの書記は一貫して、というわけではないにしてもかなりの頻度で、他のテキストからの引用の際、語・文・要素の順序を逆にするという習慣を持っていた。それが純粋に文学的な理由を持つ習慣なのか、引用関係を示す意図を持ったものなのかは未決定であるが、たとえ引用関係を示すのが目的であったとしても、当時のユダの状況を考えると、一部のエリート層にのみ意味を持つことであったであろう。現時点では、このレトリックは文学的な対称性を作るという本来の目的が拡張されたものだということを提案したい。

「交差的引用」の意図が何であれ、この技巧は、今日の読者にとってテキスト間の直接的影響関係を示す指標として機能するのである。この技巧の痕跡を辿ることによって、少なくとも ESOD から申命記へ、申命記からレビ記への引用関係が証明されたと思われる。申命記全体が ESOD の影響の産物とまではいえないが、最も重要な神ヤハウエと民イスラエルの「永遠の誓約」の確立（および当該文書自体の神聖化）という点において、申命記は ESOD の子なのである。

この認識を前提すると、宗教史学研究をさらに深めることが可能となる。本論文ではいわゆる一神教の発展過程と、それに密接に関係すると考えられる古代イスラエルにおける王権観の変遷について、整合的な把握が可能となることを示した。ESOD の申命記に対する直接的影響関係についての認識は、旧約聖書学および思想史研究にとっても有意義なものであると考えられる。